



## 総題 「ローマの信徒への手紙」における 贖い

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教材部

第 12 課 愛と律法 森 博光 2010, 9, 11～2010, 9, 17

### はじめに 9月11日(土曜日)

このローマ信徒への手紙も終りに近づいてきました。1章～11章までは「教理」でした。これから始まる12章～16章までは「実践」です。「教理」と「実践」とはいつも大切な関わりがあります。どちらが抜けてもだめなのです。

「教理」だけでは「実践」のない頭でっかちの信仰生活になります。また「教理」を学ばずに「実践」だけだと間違った熱心や異端(正しいキリスト教からはずれる)に走る危険があります。私たちは、日々み言葉を読み、それを実践し続けるクリスチャンとして歩みたいと思います。

### 1. 生けるいけにえ 9月12日(日曜日)

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマ12:1)。

ここで「生けるいけにえ」というのは矛盾した(つじつまが合わない)言葉です。「いけにえ」というのはいったん死ななければならぬものだからです。私たちは、「生けるいけにえ」として自分をささげるのですが、それでも、自分を「いけにえ」とするためには、「死ぬ」という体験、「自己に死ぬ」という体験を通っていなければなりません。だれも、自分で自分を死なせること(自己中心な自分を働かなくさせること)はできません。それができるのは神だけです。しかし、神はそのことをも、キリストの十字架によってすでに成し遂げて下さったのです。私たちはそのことの恵みをガイド11課までで深く学んできましたね。それは言いかえると「私のためのキリスト」(この自己の死も成し遂げて下さり、今私と共に生きて下さるキリスト)についての学びでした。しかしこの12課からは「キリストのための私」(神の奉仕に献身し、生けるいけにえとして神に献げて生きる私)がテーマとなるのです。

アメリカの南北戦争の時です。当時のアメリカ大統領であったアブラハム・リンカーンは、戦争が予想外に長引いて、犠牲者が増えてくると胸が痛くなりました。一日に多くの人々が死んでいく姿を見ながら、大統領の部屋で毎日2-3時間、彼は切なる祈りを神様に捧げました。すると、アメリカの大統領が熱心に祈っている姿をそばで長官達が見て、じっとすることが出来ず、自分たちも大統領の部屋の外で集まって祈りました。リンカーンが祈り終えて部屋から出てくると、長官達が申し訳ない気持ちでこう言いました。「大統領閣下、私たちが外で集まって祈りました。神様が私たちの味方になってくださるように、熱心に祈りました。」すると、リンカーン大統領はびっくりしてこう言いました。「神様が私たちの味方になってくださるように祈ったんですか。私は、今、自分が神様の側に立っているのか、神のみこころに従っているのか、それが分からないから悩んでいるんです。皆さん、神様が私たちの側に立ってくださるように祈るのではなく、私たちが神様の側に立って、神のみこころに従わせてくださ

るように、一緒に祈りましょう。」

## 2. 自分を考える 9月13日(月)

このローマ12章は、私たちの信仰生活のあり方が具体的に記されているところです。そしてガイドでは「パウロは愛を高く掲げています。・・・愛するとは、神が行動されるように人に対して行動することであり、神が扱われるように人を扱うことです。パウロはここで、この愛を実際に表す方法について述べています」と説明しています。皆さんはこの12章3～21節から何を感じ、どのように自分を考えますか。

「互いに尊敬し合いなさい」(10節・口語訳)。「進んで」という言葉があります。実際に弟子たちの足を洗われたキリストが、「尊敬し合う」ことを教えられました。「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」(15節・口語訳)。心探られる言葉です。泣く者と共に泣くことは出来やすいかも知れませんが、しかし他人の成功を自分のことのように喜ぶことは難しいものです。私たちの心がキリストによって創りかえられて始めて出来る事です。

## 3. 政府との関係 9月14日(火曜日)

「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです」(ローマ13:1)。私たちは日本国民として、法を遵守(従い、よく守る)することは国民の義務です。ですから政治にも関心を向けることは大切なことです。また善良な市民として、なおざりにされているままの法律を積極的に創り出すことにも、導かれるかも知れませんが。

通り魔殺人事件の犠牲者になった息子さんの父親が社会や国を動かし「犯罪被害者給付金制度」を作り出しました。ストーカー犯の犠牲者になった娘の死に怒りを覚えた母の運動がきっかけになり「ストーカー法」も制定されました。法は政治家ではなく市民一人一人が作るものでもあるからです。

しかし、政府の「要求が神のご要求と矛盾するときは、人間よりむしろ神に従わなければならない」(ガイド)。

この例として思い出すのが、議会の中で使徒たちが「キリストの名によって教えるはならないときびしく命じられていたではないか」と問いただされる場面です。その時ペテロをはじめ使徒たちは答えて言いました。「人に従うより、神に従うべきです」(使徒言行録5:29)。ここにクリスチャンが神に反対する教えに対して抵抗する根拠があります。権力に服従しない事によって、神に対する服従を選ぶ生き方があり得るということです。

## 4. 他人との関わり 9月15日(水曜日)

「互いに愛し合うことのほかに、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」(ローマ13:8)。パウロは「借りたものは返す」という原則に1つだけ例外があることを教えています。借りたものはちゃんと返さなくてはならないけれど、愛の負債には終わりがありません。つまり愛だけは返し終わることがなく、いつまでも返し続けねばならないただ1つの例外事項だということです。

キリストが私たちが愛してくださった愛を私たちが返済することは不可能です。罪人の私

たちが何をもってしても償いきれるものではありません。その意味で私たちは、永遠に愛の負債を背負っています。たとえば、私たちクリスチャンはみな「十字架の愛」というローンを背負っていると考えることができます。住宅ローンは最長でも35年で返済完了ですが、愛のローンは天国へ行くまで続きます。ですからもう神様への義理立ては終わった、神様から戴いた愛は全額返済したので完了ということはありません。クリスチャンは「多く愛されることより、多く愛すること」へと人生の方向が変えられた人たちだからです。

## 5. 救いは近づいている 9月16日(木曜日)

人間は3種類以上の時間をもっているそうです。まず「心臓時間」。心臓が鼓動できる回数から割り出した時間です。すべての動物の心臓の鼓動回数はみな同じなので、心臓の鼓動回数で残り時間を計算できるのだそうです。象のようにからだが大きく体重の重い動物ほど心臓の動きもゆっくりしていて長生きします。ねずみのような小さく軽い動物は逆に心臓の鼓動回数が早く短命になるそうです。最初から「終わりの時」すなわち「死」が組み込まれているのです。長生きしたければ心臓をあまりバクバクさせないように穏やかな日々を過ごさなければなりません。

第2の「脳内時間」は、別名体内時計とも言われ、夜は眠り昼は活動するリズムを作り出しています。脳の一番奥にある視床下部には約2万個の神経細胞群があり、1日の長さを正確に覚えているそうです。この機能の働きで鶏は毎朝同じ時刻に鳴いて時を知らせることができます。

第3は「力学的時間」と呼ばれるもので、1日を24時間、1週間を7日、1年を365日と決めて、日常生活を営む私たちの通常の時間感覚を指します。この3つの時間にさらに私たちは、キリストの再臨と神の国の完成という「聖書時間」を加えて、今を生きるのです。人生に第4番目の「聖書時間」があることを忘れずに生活しなければなりません。

私たちは「眠りから覚めるべき時」をすでに知らされています。キリストの再臨と神の国の完成という「特別な時間」を忘れずに、「聖書時間」の中に、生きる意味と希望をしっかりと見出しながら歩みたいものです。